
最後のピエロ

あつし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最後のピエロ

【Nコード】

N3494X

【作者名】

あつし

【あらすじ】

名前を明かさず女性に自分の思いを明かした自称ピエロと名乗る男。

ピエロの正体は一体誰なのか、過去の錯誤やすれ違いからピエロの本当の正体が判明するが…。

告白

夜十一時寝付かれなく、若者は悶々としていた。

十一月半ばになると朝晩はめっきり冷える日々が続く。

しかし、今日は寒くもなく、もちろん暑くもないそんな夜だった。若者は迷っていた。

一時は床に就き眠りにつこうとして目を閉じたが眠れない。心の迷いがますます。頭を覚醒させていく。

ベッドから上半身を起こし、大きくため息を吐いた。ベッドのポールに掛けてある携帯を取った。

若者はまるで夢遊病者のように、番号を押した。

若者の頭の中は真っ白だったのだろう。

ある女性の家に掛けた。

呼び出し音が聞こえる。

一回、そのとき若者は我に返った。

二回、何で電話したんだ？と、自問した。

三回、切ろうと思った矢先、声が聞こえた。

原田ですが

やさしい声だ。

透き通るような。

「あの、桜井といいます。原田順子さんはご在宅でしょうか」と、若者は自分の苗字だけをいい丁重に尋ねた。

「私ですけど」

電話の向こうの順子は首を傾げてる、そんな様子だった。

何を言ったらいいのか、若者の頭の中はパニックっている。何も考えずに電話を掛けてしまった。

ただ一つの思いを込めて

次に言った俺の言葉。

信じられないことを言ってしまった。

何でそんなことを？言ったのか

自分でも分らない状態だった。

「あの、ずっと前から順子さんのことが好きだったんです」
言った後で俺はいたたまれなくなった。

電話を切ろうとさえ思った。

すでに自分で自分が分からなくなってきた。

順子は詰まったような声で言った。

「あの、…よく分からないのですが」

そりゃそうだろう。

言ってる本人も支離滅裂なんだから、若者はそんなことを思い次の言葉を考えた。

なかなか言葉が見つからない。

順子は尋ねた。

「お名前は」

俺は答えた。

「桜井です」

苗字だけを、もうほとんど投げやりな言葉遣いで言ってしまった。
とにかく早くこの場から去りたいという思いになっていた。
できたら、電話を早く切りたい。

順子は強い口調で尋ねた。

「名前は！」

たぶんいたずら電話だと思ったのだろう。

怒ったような雰囲気だった。

若者は考えた。

そのとき初めて冷静になって頭をめぐらした。

名前を言うべきか。

言わざるべきか。

「名前は…ピエロ…」

結局、名前は言えなかった。

「いたずらは止めてください。切ります」

順子の口調は一段と強くなった。

怒った顔が目に見えかぶ。

「待つて、切らないで…」

そう言いながら俺は次の言葉を探した。

頭に引っかかっている過去の記憶。

若者はその記憶を言葉にした。

「順子さん。間違ってたらごめん。」

順子さんには、二つ上のお姉さんがいる。

小学校の頃、確か順子さんが五年生の頃だと思っけど君はいつもお姉さんと一緒に毎日塾に通っていた。

赤い自転車に乗ってね。

…間違ってる？ だろうか」

順子は寡黙になった。

時間にして三十秒ぐらいだろうか。

若者にとって長い沈黙だった。

「どうやって調べたの。誰から聞いたの。あなた一体誰なの！」
順子の口調は一段と陰しくなった。

「違う。誰からも聞いてない。調べたりもしてない」

「つまり、いたんだよ。僕もその塾にいたんだ」

また沈黙が始まった。

初恋の相手なんだよ。君がね。
それは言えなかった。

「その塾に一年いた。父親の転勤で、一年しか通えなかった」

言葉はないが彼女の息遣いがかすかに聞こえる。

「たぶんは君は僕を知らないだろう。でも、僕は知っている。…まさかと思った。

また会えるなんて」

「名前は？…誰なの？」

順子は、再び名前を知りたがった。

「迷惑なのは分かってる。自分でもなぜ電話したのか分からない」

「名前は？」

若者は順子の問いを無視した。

「たぶん声が訊きたかったんだ。君の声を直に」

「誰なの？」

「言ったら、ピエロさ。」

順子さん、ごめんね。君の心に土足で踏み込んでしまって。もう電話はしない…」

「さようなら」

噂

急に肩を叩かれた。

振り返れば鈴木がにやけた顔で俺を見つめている。

「いやあ、桜井」

「ああ」

俺はそいつに合わせるように軽く返事をした。

そいつの左手の薬指には金色の気障な指輪が光っている。

鈴木の後ろには順子がいた。

困ったような顔している。

鈴木と原田順子、二人はいい仲だということは周知の事実。
婚約したと言う噂もある。

「で、何か」

俺は鈴木に尋ねた。

「いや、別に」

鈴木は蔑むような笑みを一瞬浮かべながら
順子と連れ立って講義室に入った。

二人の後姿を見て、俺は思った。

「何だあいつ等、…」

普段は話も交わさない二人なのになぜ今日は馴れ馴れしく俺に話しかけたのか、と桜井は訝った。

その日を境に、俺は学生達の興味本位の視線の餌食になった。

しかも毎日に、コソコソ面白おかしく俺のことが噂になっていった。

全くなんなんだ。

「いかげんにしろよ！」

と、腹が立った。

数日後、原因は分かった。

しかし、順子の奴なぜ話したんだ。

まったく、バカにするのも程がある。

つまらん噂は気にはしていない。

二人が俺をどう思うと関係ない。

だが、男の一途な思いを踏みにじったことに腹が立った。どう考えても許すことはできない。

いや、はつきりさせなければいけない。

そう思い、…俺は決心した。

ある日、大学の門を出た順子に声を掛けた。

「話があるんだが、いいかな」

順子は以外にも素直に俺の誘いに応じた。

大学の近くの喫茶店に入った。

BGMにラストクリスマスが流れている。

窓際の席に座った。

順子の顔をこんなにまじかに見るのは初めてだ。

目は二重の、まさしく円らな瞳だ。

髪はごく自然な淡い栗色。

緊張しているのか、形の良い唇はキリツと締まっている。

右の頬にクッキリとできたエクボが心を引く。

なんちゃってね。

ウェイトレスが水を持ってきた。

「何に…する？」

俺は、ウェイトレスの手間を省くように、順子に尋ねた。

「コーヒーを下さい」

順子はウェイトレスに頼んだ。

「じゃあ、僕も」

同じものを頼んだ。

順子の左手の薬指にいつもの指輪がない。

鈴木とお揃いの金の指輪。

気を利かして外したのか？

それはないな。

まあどうでもいいことだ。

しばらく寡黙だった。

俺は窓の外を見た。

空は厚い雲に覆われている。

今にも泣き出しそうだ。

傘を持ってきただろうか？と、順子のショルダーバッグに目を遣った。

「あの、お話って？」

順子は俺に訊いた。

そうだ肝心の話をしなければ。

なぜか、もうどうでも良くなっていたのだが。

「僕の噂を知ってるかい？」

順子の顔色が変わった。

申し訳なそうに、恥ずかしさを滲ませながら順子の顔がゆがんだ。

順子の視線は俺の胸元に沈んだ。

「別に怒っちゃいないよ。噂なんて75日だ、いや今はもっと早いかな。」

気にしちゃいない。

ただ、何故なんだい。

なぜ、順子さんは僕だと思ったの。その、つまり電話の相手、あのときのピエロをね」

「ごめんなさい。まさか、あの人が皆に言いふらすなんて思わなかったの。こんな風になるなんて思ってもみなかった」

「そういうような奴さ」

だからそんなことはいいんだ。

聞きたいのは、何故僕だと思ったんだい。

桜井という苗字は三人いるのに、何故。

もし他の人だったら……て、そう考えなかったのかい？」

巡り会い

「あれから、思い出したの。あの時のことを」
順子はそう言った。

「思い出した？なにを？」

「あのときのことを。あのころの桜井君を」
順子の瞳は心なしか、俺を憐れんでいるようにも見えた。

俺は目を逸らし、早く話を切り上げてしまおうと思った。

「思い出すって？十年以上前のことをかい。さすが記憶力がいい。」

僕は昨日の事もともに覚えていない。

ヒョットして順子さん、それこそ誰かと勘違いしてるんじゃないの」

「

「桜井君、覚えてないの。あの時のことを。私を救ってくれたときのことを」

予想外の言葉だった。

俺は記憶をまさぐった。

順子を救った？

覚えがない。

俺は訊きなおした。

「救った？その子供が君を救ったのか？」

順子は、頷きながら言った。

「犬に襲われたの」

「犬に襲われた？」

俺は首をかしげた。

「覚えてないの？」

「悪いけど、記憶にない」

「いいえ。謝るのは私のほう。せっかく助けてもらったのにお礼も言えなくて」

「……」

俺はあの頃の記憶をまさぐっていた。

「お礼を言おうにも桜井君だと分かったときにはもう引っ越したあとで行き先も分からなくて」

「犬が君を襲おうとした時、その子供が君を助けたのか」

「ええ、私が犬に噛まれるはずが、桜井君が身代わりになって」

「噛まれた？僕が犬に噛まれた」

「本当に覚えてないの？」

「ああ、…でも、何故その助けた子供が僕だと言い切れるんだい？」

「その痣よ。手の甲の赤い痣」

順子は俺の右手を見た。

俺も自分の右手の甲を眺めた。

そこには少し盛り上がった、滲んだ血のような真っ赤な痣がある。

「その子供にも同じ痣があったということかい」

「ええ、同じ痣。そして苗字、思い出したのよ。あのとき、私を助けた子供の顔を」

「…」

「その面影が桜井君と重なったの」

「なるほどネ、そういうことか」

記憶をまさぐっているうちに

ある過去の一場面ががフラッシュバックのように蘇った。

「そうか、あの時、右足を噛まれたんだ。犬に。だから…足を引きずっていたのか…」

俺は、はつきりと思い出した。

あの時のことを。

「順子さん。今度の日曜日、僕と付き合ってくれないか」

俺は順子に真実を知ってほしかった。

「どうしても、付き合ってほしいのだ。どうしても」
俺は順子に懇願した。

そうだ、どうしても君に知ってほしい。

あのときの事を。

再会の理由

順子との待ち合わせは同じ喫茶店にした。

少し肌寒い季節に外での待ち合わせは気が引く。

こちらから誘ったのだから、風邪でも引かせたら申し訳ない。
とにかく、

他に気の利いた店は他に知らないから同じ場所にした。

第一これはデートじゃない。

順子には鈴木という薄らトンカチの彼氏がいるんだ。

目的は真実を伝える事。

待ち合わせの

雰囲気なんかどうでもいい。とにかく、順子に見せなければなら
ない。

日曜日の学園通りは人気がない。

九時過ぎても周辺は静まりかえっている。

喫茶店に入ればいつもの騒々しさがない。

季節柄クリスマスメロデーが店内に流れている。

普通ならこの時間は学生で溢れ、座る席がないぐらいなのにガラガ
ラだ。

まるで違う店に入った気がした。

数人のおばさん達がモーニングサービスを目当てに集まり、声高に話に興じている。

しかし、それにしてもいつもより閑散とした雰囲気だ。

この店は、俺達学生で経営が成り立っているのかな、と思ったりもした。

窓際の席を眺めた。

意外なことに順子は先に来ていた。

隣には鈴木はいなかった。

どうやら彼女一人できているようだ。

よかった。

それが一番心配だった。

あの鈴木がいたら、また今日の出来事を茶化されるんじゃないかと一抹の不安があった。

「順子さん、待った？」

そう言いながら俺は彼女の前に座った。

順子は優しい笑みを浮かべ頭を振った。

俺は、メニューに載っている日曜日だけの格安のモーニングサービスを頼んだ。

彼女も同じものを頼んだ。

ウェイトレスがモーニングサービスを運んできた。と言っても、運んできたのは五十過ぎたおばさんだが。

ゆで卵と厚手のバター付トースト、そして木串に刺した自家製のフランクフルトソーセージで、多めのアメリカンコーヒー。

俺は黙々と食べるだけだった。

彼女の方から話題を振ってくれたが、俺はただ相槌を返すのみで結局話が弾むことはなかった。

ただ、時折順子の顔をジッと見つめる事は怠らなかった。

眼の奥の網膜に焼き付けるようにジッと見つめる。

穴のあくほど見つめるので順子は困った顔で目をそらす
俺は見つめる。

なぜなら、俺にとってこれが一番必要なことだったから。

いや、俺じゃなくある男の為に。

順子は

最後にトーストを一切れ残した。

俺はそのトーストを見て尋ねた。

「もったいない、それ食べていい」

順子はまた困った顔をしたが、結局笑みを作り頷いた。

俺はごく普通に、平然と順子が残したその三角の切れ端のトーストを平らげた。深い意味はなく、ただ単純に俺の腹が満たされてないだけのことだ。

レジでは俺は強引に順子の分も支払った。

店を出れば

雲ひとつない青空だ。

しかし風は冷たい。

俺の薄手のブルゾンには少し堪える。

「寒いわね」と、順子と言う。

「そうかな、冬はこんなもんさ」と、言いながら俺は不覚にもクシヤミをしてしまった。

「ハハ、体は正直だ」

俺は負け惜しみはしない。

順子は、笑った。

「あの鈴木とは婚約してるのかい？」
俺は興味本位で尋ねた。

彼女は何も答えなかった。

実は今日も順子は左手の薬指に指輪をしてなかった。

ヒョツとしたら婚約解消でもしたのかな？

まあ、そんな下世話な興味がわいたのだ。

彼女は無視をした。

この質問は彼女を少し不機嫌にさせたようだ。

後は、まあつまらない、愚にも点かない話をしたが結構、それが以外にも受けた事に驚いた。

順子の笑顔は俺を饒舌にした。

不思議なことに

彼女といれば寒さを感じない。

むしろ、ぬくもりを感じるぐらいだ。
それぐらい、俺の心は高揚していた。

目的の場所はあと僅か。

俺の脚が重くなる。

其処に着けば間違いなく彼女の笑顔は消えうせるだろう。

手の痣

目的の場所に着いた。

ここでは4と付く部屋番はない。

他でもそうなのだろうか。

それともここだけなのか？

まあ、どうでもいいことだ。

この建物に入った時、さすがに順子は怪訝な顔で俺を見つめた。
当然だ

着いた場所がアルコールとホルマリンの匂いが漂う白い巨塔なんだから。

二週間前から個室にしてもらった。

最近、特に独り言が多くなったという事だ。

周りの患者から苦情が出た。

ブツブツうるさくて寝れないと。

寝れないか。

それがどうした。

あいつは一睡もしてないんだ。

いや

寝ることさえできない状態になってしまった。

俺はノックをした。

もちろん返事のないことは分かっている。

ゆっくり、引き戸を開ける。

俺は後ろを振り返った。

順子は呆然と立っている。

どうやら頭が混乱しているらしい。

怯えているようにも見える。

「さあ、中に入って」

俺はできるだけ優しく言った。

順子は少し迷っていたが

意を決したように部屋の中に入った。

部屋の中央にベッドがある。

ベッドは透明のビニールテントで覆われ、周りにはいろんな機材が備え付けられている。

ベッドには男が横たわっていた。

男の頭にはターバンのように包帯が巻かれそこから管が一本出ている。

一週間前に手術を行った。

脳内に溜まる水を抜くために頭蓋骨を削り抜いてチューブを差し込む手術だった。

顔は異様に浮腫んでいる。

色もどす黒く艶がない。

ただ、くぼんだ眼窩の奥で鋭く光る眼だけが天井の一転を睨んでいる。

決して虚ろではない。

その瞳だけがはっきりとした意思を持っている。

そして、

唸るような呟きが微かに口元から聞こえる。

「この人は？」

順子は俺に尋ねた。

「この男の頭には腫瘍があるんだ。悪性のね。この一ヶ月で見ても無残な姿になってしまった。まさか、…こんな姿になるなんて」

順子はベッドの上の男の顔をまともに見ることができないようだった。

「僕はこの男に迷惑ばかり掛けていた。いやなことは全部こいつに押し付けてきた。

こいつは文句一つ言わず言うことを聞いてくれた。

こいつと僕とは、まるつきり正反対だった。

こいつは勉強は良くでき、嘘はつかない。真面目で努力家。それに比べ、…ってね。

僕は比較されてきた。

僕のあまりの成績の悪さを見かねた親は僕を塾に通わした。

僕はそれを逆手に取った。

つまり、僕の代わりにこいつを塾に通わしたんだ。

拝み倒してね」

「順子さん。よく思い出すんだ。

君が犬に襲われたときのことを。君はその子供の痣を見たんだよね。どっちの手だった？右手か左手か」

そう言われた順子は、はっとした顔で眼を瞬いた。

右手に感触がよみがえる。

あの時、突然、右手を強く握られた。

現れた子供の背へ強く引かれ難を逃れたのだった。

自分の右手を見つめて呟いた。

「左手……」

順子は見た。

横たわっている男の左手にくつきりと浮き出た星型の赤い痣を。

「紹介するよ。君を命がけで助けた子供一卵性双生児の僕の弟を」

ピエロの正体

「順子さん。」

弟がこんな状態になったのは君に電話をかけて直ぐだった。たぶん、こうなることは弟も分かっていたんだ。

だから、話せるうちに自分の思いを君に伝えたのだろう。

順子さん、

弟に声をかけてやってくれ。

あと数か月の命と医者から宣告されたんだ。

意味不明の支離滅裂な言葉を口ずさんでいるがこれは病気のせいなんだ。

勘弁してほしい。

…。

何でもいいから弟に語ってくれ。

僕からお願いだ。

一言だけでも、

弟の名は…博史に」

俺は、順子に懇願した

弟に順子の存在を身近に感じさせたかった。

だから、順子を病室に連れてきたのだ。

博史に、せめて彼女の顔を見せてやりたかった。

そして生の声を聞かせてやりたかった。しかし

今となっては博史の視覚も、聴覚も機能していない。

そこまで、病魔は脳の機能を侵しはじめた

順子をここに連れてくるのが俺が最後にできる弟への罪滅ぼしだ。

順子はビニールの酸素テントに近づいた。
テント内にある雑多な医療機器。

そこから規則的に、そして無味乾燥な機械音が単調に繰り返し聞こえる。

順子は横たわる男を見た。

男の体はベッドに備わっているベルトで固定されていた。
要するにベッドにくくりつけられているのだ。

細くやせ細った右腕には点滴のチューブ。

腰の部分からは尿道を確保するカテーテルの管が出ている。

そして頭には脳内の水を抜くチューブが。

時折、発作が始まり体全体が痙攣を起こす。

だから、チューブが外れないように体を動かさないように縛られている。

一体何時間、いや、それとも何日、仰向けのまま横たわっているのか。

苦しくないのだろうか、それとも身動きできないその体勢に慣れたのだろうか。

人形のように微動だにしない体、

ただ眼と唇だけが細かく震えるような動きを繰り返している。

自分はまだ生きているのだと訴えるかのようだ。

「博史さん。あの時は…ありがとう」

順子は呟いた。

その囁くような順子の声に反応するかのように
横たわった男の小刻みに動いていた瞳が止まった。

顔がゆつくりと順子の方へ向き始めた。

男の瞳は、はっきりと意思を持って順子を見つめたのだった。

無表情の顔が一瞬笑みを作ったように見える。

奇跡が起きた。

俺は目を見張った、そして、はからずも涙が出ってしまった。

しかし俺が喜んだのはほんの束の間だった。

博史は、再び自分の世界に入り込んでしまった。

眼は天井の一点を見つめ始める。

腫瘍のせいで、瞳は小刻みに動く。

意味不明の言葉の羅列を再び唱え始めた。

その後、俺と順子は何も語らず博史を見つめていた。

その間、穏やかな時間が流れていった。

言葉は必要なかった。

二十分程度の面会を終え俺と順子は病院から出た。

俺は順子を病院のすぐ隣にある喫茶店に誘った。

そこは心なしか、

老人と、血色の悪い人達ばかりがやたらと目に付いた。

「悪かったね。せつかくの日曜日を潰してしまつて」

「いいえ」

「弟が君を見て微笑んだときは、驚いた。

微かだけどね。

博史があんな表情をしたのは久しぶりだよ。

君を連れてきて良かった。

ほんとに感謝している」

順子は首を振った。

「あのととき、私に電話を掛けたのは弟さん、博史さんが掛けたのね」

俺は頷いた。

「まだあの時は、意識はしっかりしていた。あんな風じゃなかった。君に電話を掛けた後さ、容態が急変したのは」

順子の顔は沈んだ。

「前も言つたように

あいつも、自分がこうなることを、覚悟していたんだ。だから、電話したんだと思うよ。

自分がまともなときに自分の思いを吐露したんだ。

君にぶつけたのさ。

あいつにとって君への思いが生きている証だつたんだ。

君にとっては迷惑の話だろうけど」

順子は激しく首を振った。

「とにかく、ありがとう」

そう言って俺は、腕時計を覗いた。

もう昼近くだ。

順子を食事に誘おうか、と思ったが気の利いた場所が思いつかない。
第一、弟に会わせした後
すぐ別れるつもりでいた。

それに、彼女を待っている奴がいる。
そう思ったとき、ふと、あのにやけた顔が目に見えた。

「順子さん。この事は、できたら誰にも言わないでほしい。これは、昔、君を慕った男がいたということで胸に秘めておいてほしいんだ。とくに、君の彼氏には絶対に言わないでくれ。弟のためにも」

「あの人とはもう……」

順子は囁くように言った。
が、最後の言葉が聞き取れなかった。

「さあ、もう出よう。」

俺はレシートを取って席を立った。

いつの間にか店内は人で溢れていた。

老人特有のしわがれた声と、咳き込む人達で満席になっていた。
どこか違った意味で活気に満ち溢れていたのだった。

レジで自分も払うと順子が言った。

そんなことはできなかった。

こちらから誘ってしかも病人の見舞いまでさせてしまったのに、拳
句の果てに割り勘では男の面目丸潰れだ。

ここでも、

半ば強引に自分が払った。

木枯らしが吹く歩道を二人で歩いた。

途中、不覚にも俺の腹の虫が鳴り出した。

しかも、特段にきわめて大きく苦しそうに。

俺は、それをきっかけに断られるのを承知で尋ねた。

「どう、食事でも？」

順子は優しい笑みで頷いてくれた

恐怖のレストラン

入ったのはフランス料理専門の店だった。

あとで気が付いたのだが、いわゆる高級と言われる五つ星のフランス料理店だった。

気軽に食べれる店ではなかった。

もちろん学食のAランチ、Bランチ、丼物でもない、すべて名立たるフルコースだ。

もう一つ付け加えれば食べるのに色々とマナーがいる場所でもある。

知らないと恥をかく。そういう場所だという事を、席に着いた後で知ってしまったと言う

後の祭りの俺だった。

雰囲気の良いレストランだ、と思って入ったのが失敗だった。

ウェイターの出で立ちからして一味違う。

つまり、慇懃無礼にもほどあるってところだろうか。

メニューを渡された。

横文字がズラッと並んだ教科書のようなメニューだ。

しかも金文字で書かれてある。

右端に書いてある数字が半端じゃなかった。

0が一つ多いのではないか？、コンマの位置が一つずれているのか？と眼をしばたくような値段だった。

レストランに入った時、順子の顔が心配そうに俺を見つめた意味を今、納得、理解した。

まあいいさ。

俺も男。

たかが、昼飯でビビることもない。

どうにでもなれた。

と半ば、まないたの鯉状態で、料理される覚悟で声を出した。

「このフルコース」名前がよく分からないから指をさしてウェイターに、一番リーズナブルなコースを見せた。自信満々で言ったが、なぜか声が枯れていた。

まあ、金が足りなければカードがある。

そんな気持ちで

つい、つい

口から青色吐息。

「ここを出ましょ」

と、順子は俺の顔色を見ながら言った。

まったく、その言葉
男の面目を潰すなあと、
俺は、少し白けた。

が、気を取り直し言っただけだ。

「たまには、こういう高級フランス料理を食べてみたかった。君のおかげだよ。

一人じゃなかなか来れないからね。全く久しぶりだ」

「久しぶりって、よく来るの？」

「そうだね、こういう高級フランス料理は僕が幼稚園の年長さんの時代以来だな」

「えっ」順子はキョトンとした顔で俺を見つめた。

「両親に連れられてね。ナイフとフォークで弟とチャンバラしたのを思い出すよ。

おもいつきり父親からゲンコツもらったけどね」

順子は笑った。

笑い顔もチャーミングだ。

と、俺はなぜか感心してしまった。

「父親は商社マンでいつも外国を飛び回っていた。だからでもないが、たまに親子で食事に連れて行かれるのは洋風のレストランばかりだった。

たぶん、食事のマナーを僕ら兄弟に教えたかったのかもしれない」

「じゃあ、フランス料理のマナー完璧ね？」

「言っただろ。幼稚園時代だぜ。忘却の彼方だよ。君だけが頼りだ」

順子は再び笑った。

料理が運ばれてきた。

蝶ネクタイで燕尾服の、オールバックで銀縁めがねの…とにかく客の俺よりビシッと決めた男が

ワインや、皿に盛り付けられた食材の説明をし始めた。

分かった言葉はトリュフとフォアグラ、オマール海老、松阪牛。

とくに、トリュフと、フォアグラの単語が三回も出てきたのには驚いた。

そんなに豪勢に使わなくても、俺は味音痴なんだから。
と、言っただけ。

しかしこんなに気が滅入るレストランとは思っても見なかった。

「チマチマ持ってこずに、井に一つにまとめて持って来い」
とも、言っただけ。

持ちなれていないナイフとフォークでぎこちなく食べていると順子が俺に話しかけた。

「弟さんの事もっと知っておきたいんです。良ければ教えてくれませんか」

俺は、手を止め彼女を見つめた。

眼は逸らさず穴のあくほど彼女を見つめた。

そして言った。

「いいよ、何でも聞くがいい」

不思議な力

「博さんは、いつからその…脳腫瘍と言う病気になったの」
順子は素朴な疑問から尋ねた。

「中学二年の頃だった。弟は学校内で急に発作を起こして直ぐ病院に直行した。

担当医は晩期性テンカンだと言った。
ろくに検査もせずだね。

確かに処方された薬は博の頭痛を和らいだが、発作は日増しにひどくなっていき、

結局大学病院で精密検査してもらうことにしたんだ。

悪性の腫瘍があることが分った。

しかも、相当進んでいるとのことだった。

悪い事に手術の難しい場所で、外科的に取り除くのは危険すぎると言われた」

順子は視線を落としていた。

俺は話を続けた。

「かろうじて、高校には進学できたが次第に薬の効果が薄れ発作と頭痛に苛まされた。結局、高校は二年で中退した。薬物療法、免疫療法、放射線治療、

来る日も来る日も治療は繰り返された。

病状は一進一退。博の心もすでに限界に達していた。

ある日を境に、博は治療を一切断念することに決めた。

それ以後、博は家に閉じこもり外界との交流を全て避けて来た」

「外界の交流を避けたって、一度も外にでなかったという事？」

「ああ、一度も」

順子は少し考えるような素振りでもた尋ねた。

「一度も外に出ていない博さんがどうやって私を捜しだしたの？ それにどのようにして私の家の電話番号を調べたの？」

順子のその疑問に俺は答えるのを渋った。

寡黙になった俺に順子は勝手に自分で結論を出した。

「電話をかけたのは、本当は桜井君、あなたじゃないの。弟の博さんに私を合わせるために」

そうか、そう考えたか。

「違う、弟は君を見たんだ。博は君を見つけたんだ」

「でも、一度も外に出ていない博さんがどうやって私を見つけることが出来るの」

「なぜ弟が君を見つけたのか。それには理由があるんだ」

「理由って」

「その理由を言うと君はきっと信じないだろう。言えば、あの鈴木と一緒に僕たち兄弟の事をバカにし笑うだろう。だから理由は言わない。」

僕の今日の目的は弟に君を合わせる事だ。それが達成した君には感謝している。その理由は君の想像に任せるよ」

「話してくれないの」

「話す必要がない。僕達兄弟の事だ」

俺は少しきつく言った。

もうその質問は繰り返さないでくれと言うように。

「話せばいいじゃないか」

俺の頭にあいつの声が聞こえた。

俺はその声に対して答えた。

話しても信用されない。話せば、また大学内で物笑いになるだけだ。

「大丈夫だよ。順子さんはあの鈴木と別れたらしい。だから大丈夫さ。きつと、信用してくれるさ」

俺は考えた。

こんな事を話せば、変人扱いにされるに決まっている。

だが、あいつが話してくれと言うんじゃないか。

順子は鈴木と別れたのか。

そうなることは分かっていたが、こんなに早くとはね。

「順子さん、…話すよ。弟が君を何故見つけ出したかを」

順子は目を俺に向けた。

「この事は信じようが信じまいが君の胸だけに治めてくれ。決して

言いふらさないように」

順子は頷いた。

「俺と弟は一卵性双生児、だから考え方はよく似ていた。好きなものや嫌いなものも同じだった。ただ、違っている

点もあつた。勉強嫌いの俺に対し弟は勉強の虫だった。ひ弱な弟に比べ俺は不死身の体を持つことができた。

いや、不死身は少しオーバーだった。腕力や体力に掛けては俺の右に出る者はいないぐらいの体と言った方がいいか。

だから、弟をいじめる奴は俺は容赦しなかった。腕力に物を言わせたわけさ。

それが、嵩じて悪のグループのリーダーになつたこともある。

まあ、そんな話はどうでもいい。

実を言うと

弟は不思議な力を持っているのだ」

順子の大きな瞳は微動だにしなかった。

「つまり、弟の眼は僕の眼を介して僕が見たものと同じものを見ることができなのだ」

殺人鬼

「つまり、僕がたまたま大学内で君を見かけた。一瞬だったのか、それともジッと見つめ続けていたのか覚えてないけど、つまり僕が見た君をあいつは同じように見たのさ」

順子は戸惑っているようだ。表情はどこかに飛んでいる状態になっていた。

理解はしていないだろう。いや、理解できるわけがない。俺はそう判断した。

「ハハハ、冗談さ。そんなの有り得ないえよ。僕の見たものが全てあいつも同じように見えるなんて……嘘っぱちもいいところ。つまり君が言ったように僕が電話したのさ。そういうことさ」

少しホッとした顔を見せた順子は「投げやりね」

と、俺の口調に食いついた。

確かに俺はめんどくさくなった。

この秘密は俺達兄弟だけにしか理解できない。いや、俺達だってこの摩訶不思議な能力を理解なんかしちやいない。誰も理解できないだろう。

俺はテーブルの上を見渡した。料理は一通り出尽くしたようだ。

「そろそろお開きにしよう」

俺はレジでカード払いを澄ました。

順子は割り勘をせがんだが俺は断った。

またの機会の時に、君に奢ってもらうよ
全くもって気障な言葉を吐いてしまった。

順子と別れたのは、午後四時を過ぎていた。

冬は日が陰るのが早い

街灯がほんのりと灯り始めた。

彼女のマンションまで送り、その玄関の前で順子は言った。

「もしよければ、また博さんのお見舞いに伺ってもいいですか」

「もちろん、いつでもどうぞ。弟も喜びます」

俺が反対する理由はないよな、俺は心の中で呟いた。

「うん、これから楽しみだなあ」

あいつは、嬉しそうに俺に言った。

ここは廃墟ビルが建ち並ぶ誰一人いない街。

不景気が続き、繊維街と称されるこの一角はゴースタウンと化し
地面のコンクリートや、アスファルトの割れ目から草木が生い茂る
廃墟となっていた。

そのビルの中にある一つの部屋に懐中電灯の光が揺れ動いている。

その光芒は部屋の中央に向かった。

そこには三脚の椅子が並んでいる。

椅子にそれぞれ二十歳前後の若者が三人腰かけている。

三人とも背筋を伸ばし硬直したように微動だにせず座っていた。

しかも、三人共同じような野球帽を被りながら。

懐中電灯を持つ男の足元にはもう一人、野球帽を被った若者が倒れていた。

ただその野球帽は庇のつばだけが残っているだけだった。

そして若者の頭からは大量の血が床に流れていた。

懐中電灯を持つ男は椅子に座っている若者達に話しかけた。

「諸君たちがかぶっている帽子には火薬が仕掛けてある。

火薬の量は少量だが威力はある、その中に細かい金属片が詰まっている。爆発すれば金属片が頭蓋骨を砕き脳みそに向かって

驀進する。後はこの男のように頭から血を流して死ぬことになる」

男は懐中電灯で死んでいる男の顔を照らした。

「いいかい、頭を一センチ動かせば火薬が爆発するように仕掛けてある。

死にたい奴は椅子から立ち上がればいい。一瞬で地獄に連れてってくれる」

そう言いながら男は足で死体を蹴り上げた。

「なぜこんなことをされたか分るだろう。自分たちの心に聞けば分かるはずだ。諸君、その姿勢を崩すな。

少し苦しいだろうがあと三分だ。

三分たてばその苦痛から解放される。そのままの姿勢で自分のやったことを反省しろ」

男は部屋から出た。

階段を降りながら男は腕時計を見た。

「あと二分だ。二分経てば时限装置が働いてドカンだ、あの世へ飛んでケ」

男はそう呟き口笛を吹いた。

ジョーカー

「お父さん、行ってきます」

高校生の藤田小百合は急いで玄関に向かった。

「朝ごはん食べなくていいのか！」父親の野太い声が玄関まで響いた。

「今日は試験があるの。食べてたら送れちゃう」
その声と共に玄関のドアのしまる音が鳴った。

「全く、もっと早く起きれば良いのに、ご飯を食べずに学校へ行くなんて、試験がうまくいくか」

藤田幸平は、自分の食べた食器を流しで洗いながら愚痴た。

夕飯のおかずは冷蔵庫にある、チンして食べる

幸平はそうメモを書きテーブルに置いた。

「じゃあ、行ってくるよ」

そう言いながら幸平は居間の隅にある小さな仏壇に手を合わせた。仏壇の前には優しい笑顔の女性の写真立てがある。

妻の三回忌を数日前に済ませた幸平は、娘の小百合と二人暮らし。

その生活にもようやく慣れてきた。

朝ごはんは夕飯の用意は全て幸平が行っている。

最初の頃、娘の小百合は、自分が支度すると言っていたが、作る物はいつもパターンが一緒。

カレーにラーメン、スパゲッティにコンビニのおにぎりほとんどそのような物ばかりで

幸平は食べ飽きた。

という事で、食事は全て幸平が行い洗濯や、家の掃除は娘に任せる

ことにした。

幸平は警察官だ。いわゆる私服刑事、しかも強行係。凶悪犯罪を手がけている。ひとたび事件が持ち上がれば、家に帰ることはままならない事は度々。

そういうことも娘は理解してくれている。

幸い、幸平の姉が側にいるので、事件が長丁場になったときは娘の面倒を見てくれることになっていて、助かっている。

幸平は、部屋のドアの鍵を掛け仕事場に向かおうとした矢先、携帯が鳴った。

相手は、部下の下田という新米刑事だ。

こんな朝早くなんだ、と呟き電話に出た。

「なんだ、朝早くから」

電話の向こうでは下田が慌てた口調で用件を告げた。

「課長、事件です。今朝早く繊維街で死体が発見されました。どうやら殺人事件のようです。」

初動捜査に直ぐ合流しろとのことだ

「分った。このまま直行する」

どうせ、暴力団のイザコザだろう、幸平はそう呟き足早に現場に向かった。

ジョーカー2

「何か事件でもあったんですかね」

タクシー運転手はそう言いながら辺りをキョロキョロ眺めた。

「ご苦労さん、チケットで頼むよ」

藤田は、タクシーチケットを渡し急いで数人の警官が取り巻いているビルに向かった。

「あ、刑事さんだったの」

運転手は体を揺らしながら走り行く男の背中を見つめた。

現場は廃墟ビルの三階の一室だった。

床は血糊で黒く染まっていた。死体は四体、四人ともキャップのような帽子を被っている。

ただ頭を覆っている部分が破けていた。

頭を散弾銃で打ち抜かれたような状態だ。頭蓋骨がこめかみ部分から上を碎かれ脳漿が溢れ出ている。

まさしく凄惨な現場だ。

数人の鑑識課が忙しく動き回っている。

「ご苦労さん」

藤田は鑑識課の一人に声を掛けた。

「凶器は何だい、散弾銃のような感じにも見えるが」

「はい、そもも見えますが、でもこの傷口見て下さい」

鑑識課の男は遺体の頭の部分を指差した。

「斧でおもいつきり叩かれたように頭に頭蓋骨が割れてます。散弾銃ならもつと頭は跡形もなく碎けてますよ。それと

この脳漿を見て下さい」

頭蓋骨の中からはみ出た白っぽい豆腐のような脳みそを指差した。

「よく見るとキラキラ光ってるでしょう」

「うん、確かに、なんだこれは」

「金属片です。工場から出る金属の破片でしょう」

「何でそんなものが脳みそに入り込んでるんだ？」

「たぶん、これが頭蓋骨を割った凶器です」

「えっ？どういうことだ」

「見て下さい。四人全員キャップを頭に被っています。そのキャップには、縁に厚い鉄の板状の物が取り付けられています。想像するにその鉄枠の内側に火薬が仕込まれていて

その火薬の内部に金属片が収まり、火薬の爆発と同時に金属片が頭蓋骨を砕いた、と推測できるんです」

「ふーん、しかしなんで、そんな手間のかかる殺し方をしたんだろう」

藤田は腕を組み首をかしげた。

「課長、おはようございます」

突然の聴きなれた声に藤田は振り向いた。

「いやあ、下田。大変な事件だなあ」

藤田がそう言うと、下田はハンカチを口に当て吐きそうな表情をした。

「おいおい、この神聖な現場で吐くんじゃないぞ。外で吐いて来い」

「いえ、大丈夫です。もう十分外で吐き出しました。胃には、もう何も残っていません」

「そうか、下田はこういう凄惨な現場は初めてだったんだなあ」

「はい、死体を見るのも初めてで」

「なるほど、まあ、最初はそんなもんさ。ところでガイシャの身元はワレタかい？」

「はい、免許証がありましたので今、本庁へコピーを送り前科の有無等を洗い出ししています」

「課長、これを」

下田は一枚のトランプのカードを見せた。

「なんだそれ？」

「ガイシャのそばに落ちていたんです」

「トランプのババか」

「指紋はついていませんが、ヒョツとすると犯人が置いていった物じゃないでしょうか」

「もしそうだとしたら、こいつは厄介だぜ」

「えっ？」

下田は怪訝な顔で藤田を見た。

藤田はそのカードを見て直感した。

俺たちへの挑戦状だ。

第二、第三の同じような犯行がおきるかもしれん。

博の不思議なパワー

俺と順子は大学内では挨拶程度の付き合いで終始した。

その頃では、俺の噂、俺の順子への片思いの噂はもうすでに過去の遺物になっていた。

いや俺の噂より、鈴木と順子が別れたと言う噂話が大学内で静かに広まっていた。

その噂が広まるにつれ、俺がまた電話で順子にちょっかいをかけるんじゃないかと

あらぬ噂も立ちあがった。

俺はもううんざりだった。

弟、博の体調は日を追うごとに弱まっていくようだった。

命の光は思ったより早く消えかかろうとしているのかもしれない。

順子は週二回のペースで見舞いに来てくれた。

いつも病室には、新鮮な花が添えられていた。

順子が見舞いのつど持って来てくれる。

「いつも、花をありがとう」

「これしかできないから」

「とんでもない。博はきつと喜んでいるよ」

いや、喜んでいどころじゃない。

博は俺にいつも言っている。

「食事に彼女を誘えよ。せっかく見舞いに来てくれたのにそのまま帰らしちゃあ申し訳ないよ」

博は時折、いや、ほとんど毎日かもしれないが、突然、俺の頭の中に入り込んでくる。

俺の頭の中に入り込んで、俺と会話する。

信じられないかもしれないが、俺達兄弟ではごく普通の事なんだ。博が言うには幽体離脱が起きている、と言っている。

この状態のとき、体の苦痛は消えているようだ。

ある日のこと。

いつものように見舞いを終えた順子が部屋を去ったあと、急に弟が激しく痙攣を起こした。

俺はあわてて弟を注視した。

「どうした、博」

弟は、一段と大きく目を剥き俺を見つめ、俺の心に入り込んだ。

「順子を守れ」

順子を守れ？

何を言っている

いったい誰から守るのだ。

「外を見る！」

博は俺の頭の中で怒鳴った。

俺は病室の窓から外を見た。

病院の玄関から出て行く順子を発見した。

順子の側に車が寄ってきた。
友達の家か？

と思ひしばらく眺めていると

順子が首を振りながらその車をやり過ぐそうとしている。

ナンパされているのか…

車は順子の歩調に合わせ付きまとっている。

なんてしつこい奴だ。

俺は腹が立った。

その車を良く見ると外車だ。

ボンネットの先端に見慣れたマークが付いている。

青いBMW

それにしてもしつこい。

運転席側の窓から首を出し順子を執拗に誘っている。

茶色に髪を染めた男だった。

嫌がっている順子に執拗に声をかけている。

車内は一人ではないようだ。

三、四人の男たちが垣間見えた。

単なる行きずりのナンパ連中なら見過ぐすところだが、どうもおかしい。

あまりにもしつこいし、傍から見れば嫌がらせにも思える。

しかも、どうやらBMWの連中は順子を知っているようだ。

順子の名前で声を掛けているのが微かに聞こえた。

つまり、初めてのナンパじゃない。

俺は弟の「順子を守れ」の声に従うことにした。

俺と博

もうすこし、俺と弟の関係を話そう。

俺達二人はまさしく瓜二つ。

誰もが見間違う。

長年俺たちを見慣れている親でさえも間違っぐらいだ。

外見でたった一つの違いと言えば、手の痣。

俺が右手の甲で、弟の博が左手の甲。

その痣を隠せば俺は博に成りすますことができる。もちろん博も。それをいいことに、今までいやなことは全部弟に押し付けてきた。

従順な弟は素直に俺の言葉に従った。

父親が大事にしていた車に傷をつけたときも弟が身代わりになってくれた。

母親が用事を頼んだときも、

そして俺が万引きで捕まったときも

博が全て代わりを務めた。

俺と弟はまるつきり考え方が違う。

例えばあいつが正なら俺は悪。

色で言えばあいつが白なら俺は黒。

あいつが光なら俺は影。

ひとつの卵に二人の人間が生まれた。

あいつと俺は一卵性双生児の片割れ同士。

人の心に善と悪が同居しているなら
あいつが善を受け継ぎ俺が悪を受け継いだ。
そんなところだろうか。

俺が人間の醜い内面を全て引き受けた。
そう思うようになったのはいつだろうか。

会社を経営していた両親が飛行機事故で死んだ。
あの時からだろうか。

中学生の頃、弟が脳腫瘍だと分かった時からか。
周りの人間が保証金、会社の経営権をめぐって俺達兄弟の中に割り
込んできた時からだろうか
とにかく、まだ悪になりきってなかった俺が悪に徹してやろうと
思ったのは

その辺りに間違いない。

弟の不思議な力に気づいたのは、幼稚園の頃だった。

俺がめずらしく風邪で幼稚園を休んでいた時、突然頭の中で助けを
呼ぶ声が聞こえた。

弟の声だった。

博は幼稚園に行っているのになぜ、家にいるのかと思い俺は家の中
で弟を捜したぐらいだ。

後で分ったのだが、声が聞こえたとき弟は幼稚園でいじめに会って
いたのだ。

その事をきっかけに、弟の不思議な能力を始めて知った。

俺が見たものをリアルタイムで離れていながら見る事ができること。
離れていても俺の頭に入り会話ができること。

俺は驚いた。

今まで気づかなかったのは、いつも弟が側にいたからだ。
離れる事がなかったから気づかなかったただけだ。

もちろん、弟をいじめた奴らは二度と手を出さないように俺が懲らしめた。

俺にも多少の秘められたパワーがあった。

弟に比べれば微々たるものだが。

要するにずば抜けた運動能力だ。弟のひ弱な分、俺がその才能を全て引き受けたって感じた。

具体的に言えば、並外れた動体視力、瞬発力、持続力、まあ、体を動かす筋肉の質が

もともと並外れているという事だ。

俺のことはさて置き

もう一つ驚くべき力が弟にはあった。

それは人の心の中を覗く事ができる事だ。

弟のその特異な 才能が花開いたのは、両親が亡くなった時に起きた会社の存続の是非だった。

この時、色々な人間が俺たち兄弟の前に現れた。

寄ってくる人間共は多かれ少なかれ事業で蓄えた資金や財産を、掠め取ろうとしているハイエナ達だった。

その善人面したハイエナ共を仕分けたのが、弟の博だ。

心の奥底を見通せば考えている事等、博には一目瞭然だった。

ほとんどの人間は、企みをもって近付いてきた。

左も右も分らない子供

から、会社の権利や資金を掠め取るのは分けない事だと思ったに違いない。

弟は信用できる者だけを選び始めた。

その中でただ一人、秘書をしていた奥平という六十過ぎの男だけは他の者とは違っていた。

会社のために身を粉にして働いてきた事が読み取れる。
親も、秘書という肩書きでいつも相談相手として傍らに置いていた
ようだ。

俺達はこの奥平という男に会社の全てを任せた。

俺は俺でその頃から

がむしゃらに強くなりたかった。

空手、合気道、少林寺、ボクシング。

全てマスターした。

悪の花が俺の心を開き始めたのか

いつの間にか高校に入る時分には暴走族の頭になっていた。

その後、族は解散したが。

しかし、いまだにその残滓を俺は引きずっている。

俺を慕う十人のかつての族仲間達。

今ではお互いの近況を話し合う呑み仲間となっている。

と言う事で、俺達、元暴走族は

B M Wの連中の割り出しにかかった。

四人の身元

夜の七時、家路へ急ぐ人々が駅前を行き来する。

一人のサラリーマンが足を止め駅ビルを見上げた。

その視線の先に電光掲示板のニュースが走っている。

立ち止まったサラリーマンを見て、もう一人のサラリーマンが同じように掲示板を見上げる。

また一人、また一人と大勢の人が同じように立ち止まりその文字を追った。

掲示板の文字はこうに流れていた。

昨夜未明、東京都港区繊維問屋街の廃墟ビルにて若い男性の遺体が四体発見される。四人の男性全てが

爆発物による衝撃で頭部に損傷を加えられ、頭蓋骨破損にて死亡の模様。殺人事件として警視庁は被害者の身元の捜査を開始。

「物騒な世の中になったもんだ」

六十前後のサラリーマンがため息交じりで呟いた。

報道陣が取り巻いているのは捜査主任の平形淳という男だ。

「被害者の身元は分りましたか」

報道陣の中から質問が出た。

平形は用意していた便箋に目を通した。

「発表します。被害者の名前に敬称を省略させていただきます。

四人の被害者の名前は、後藤 力 無職、住所不定で年齢 二十四歳、島田 淳也 アルバイト勤務、東京葛飾在住で 二十三歳、

沖田 満、港区在住 職業は派遣社員 二十四歳、高島 郡司 杉

並区大学生 二十歳。以上です」

「四人の被害者の繋がりはどうなっていますか」

「まだ捜査段階であります。特にながりがあるような関連性は見当たりません。それぞれが他人同士で面識もない四人と思われる」

「面識もない人間同士が何故あのような寂しいビルに集まったのでしょうか？」

「他殺ではなく自殺じゃあないんですか」

「物取りですか、怨恨ですか」

「単独犯ですか？」

「現場にトランプのジョーカーが一枚置いてあったと聴きましたが……」

矢継ぎ早に畳み掛けるように記者の質問が飛んだ。

ジョーカーという言葉を聴き平形は眉をしかめた。

「まだ捜査段階ですので詳細な事は分り次第順次発表します」

平形はそう言つて足早に報道陣から姿を消した。

「なんで、トランプの事がブンヤにもれたんだ」

平形は不機嫌な顔で呟いた。

朝中日報の事件記者、坂口正太は携帯を掛けた。

「俺だけど、目新しい情報はなかった。あと、被害者の身元が分つた。今から言う、一人は……」

坂口は周りにいる報道記者を避けるように廊下に出ながら小声で話続けた。

「この四人の詳細な素行を徹底的に調べてくれ。何か関連があるよ

うな気がするんだ。
えっ？見出し？そうだな、…殺人鬼、爆破魔ジョーカーって言う見出しはどうだい」

コンクリートむき出しの壁で囲まれたワンルームマンションの一室。作業机に向かって男は息を殺し慎重に手を動かしながら黙々と仕事をしている。

机の上にあるのは色褪せた金物でできた岡持ちだ。その中に顔を突っ込み、なにやら

粘土用の物体を張りつけていく。少しづつ岡持ちの内側は均等に同じ厚さの粘土様の物体で覆われた。

その上にまた同じように銀紙を張りつけていく。

銀紙を張り終えた男は

岡持ちの中の真ん中の仕切りに手を載せ力を入れた。僅かにその仕切りは下に動く。男の手が離れると

その仕切りがユックリユックリと上に上がる。

目では確認できないほどのユックリさでその仕切り全体が上に移動する。

その一センチ程度の動きを男は慎重に何度も何度も繰り返しながら見つめた。

時計を見ながらその仕切りが上に到着するまでの時間を計った。

「ちょうど三分だ。何度やっても三分、最後の三分。三分のおまけだ」

男は口元を歪めながら笑みを浮かべた。

連続事件

シャッター通りと名づけられて久しいこの商店街は昼間でも人はまばらで閑散としている。

最近、この場所をよく見かけるのは猫と、イタチ、そして浮浪者。シャッターには色とりどりの落書きが施されている。

そんなシャッターの一つに『暴力団出てけ』という文字が書かれたのがある。

そして『暴力団を締め出そう』という幟が、ある建物を囲むように立てられている。

その建物は壁が黒塗りの重厚感ある三階建てのビルであった。周りの白塗りの商店と比べれば威圧感の塊のような存在になっている。

その黒ビルの前の通りをはさんだ真向かいの場所に木造二階建ての建物がある。

その建物のスレートの屋根の梁には監視カメラが二台取り付けられ、真正面の黒ビルを見下ろすように設置されていた。

その建物が建てられている場所は駐車場らしく

急こしらえて建てたと言うような代物で、よく建設現場に見られる寝泊りができる休憩所のような建物だ。

ブザーが鳴った。

頬に傷跡が残る強面の男がモニターを見た。

画面には、白衣の男が突っ立っている。

年の頃は二十代前半ぐらいの男だろうか、頭には飲食関係の従業員が被るキャップをのせ、右手に岡持ちをぶら下げている。

明らかに出前を配達に来た店員の風体だ。

「誰だ？」

男はマイクで玄関の配達員に尋ねた。

「来来軒です。ラーメンをお持ちしました」

「ラーメン？」

男は首を傾げた。

「チョツと、待つてろ」

そう言い残し、男は別の部屋に出向いた。

部屋には十人ほどの男達が花札に興じていた。

「あの、すみません」

パンチパーマの男がタバコを吹かしながら、煙い目で男を見上げた。

「なんだい？」

「はい、ラーメンの出前持ちが来ているんですけど」

「ラーメン？誰か頼んだ奴いるか？」

パンチパーマの男は周りを眺めた。男達は一斉に首を横に振った。

「誰も頼んでいないぜ」

「分かりました。すぐ追い返してやります」

「マア、待てよ。調度腹が減ったところだ。せつかく持ってきたんだから食べてやるうじゃないか。

その出前持ちを中に入れてやれ」

色褪せ、くすんだ銀色の岡持ちの蓋を挙げれば、中にラーメンが二つ入っている。

来来軒の若い出前持ちは震える手で下の段からユックリとラーメンを出し、机の上に置いた。

出前持ちの店員は壁に掛けてある時計を見た。秒針が十二に達した時、もう一つのラーメンを取り上げた。

「悪いが、あと、九つ持つてきてくれ」

「は、はい、大至急」店員は畏まった顔で返事した。

「ところで、出前を頼んだのは誰だい。頼んだ奴の名前を教えてください」

「電話を受けたのは他の人間で、僕は出前専門なんで」

「そうか。どつかのアホのいたずら電話だろう。」

「ヒョットすると前のアホ共が仕組んだ嫌がらせかも知れねえな」

「あいつ等、怒鳴り込んでやりましょうか」
年の若い、丸坊主の男が叫んだ。

「そんなことしたら、向こうの思う壺だ。何だかんだ言いがかり付けてサツが乗り込んでくるぞ。まったく、どっちがヤクザかわかりやしねえ」

出前持ちの若者は事務所の壁の時計を眺めた。秒針が数字の十二を回った。
若者の額から汗が吹き出た。

「じゃあ、急いで残りのラーメンを持ってきます」

若者が玄関のドアを開けようとした。

「おい、今度持つてくる時は、ちゃんと確かめてもってこいよ。でないとなんか金払わんぞ」

「分かりました。以後、気をつけます」

「おい、この岡持ちもって行けよ」
パンチパーマの男が言った。

「いえ、岡持ちは」

店員の声が一瞬詰まった。
時計の秒針が再び十二を回ろうとしているのを、
店員は覗き見た。

「た、食べ終わったら、食器を岡持ちの中に入れて外に出しておいてください」

店員は、そう言い終え慌ててドアの外に飛び出した。

「なんだい？あの慌てようは」
パンチパーマの男は苦笑した。

「このラーメン、ちょっと伸びてるんじゃないのか？」
そう言いながらパンチパーマの男は麺を啜った。

「いやに重てえなあ。まだ何か入ってるんだろつか」
そう言いながら、岡持ちの蓋を引き上げ中を覗き込んだのは坊主頭の男だった。

「何やってるんだ」

髪をポマードで撫で付けたオールバックの男が坊主頭に怒鳴った。

「ええ、中にもう一品入ってないかと思つて」

オールバックの男はあきれた顔でせせら笑った。

「全く卑しい奴だ。親の顔が見たいよ」

そう言つて、パンチパーマのラーメンの食べっぷりを見た。

「どうです、組長お味の方は」

「まあ、こんなもんだ。お前も早く食べないと伸び切っちゃうぞ」

「はい、じゃあ頂かせてもらいますか」

「何だこれ、何かが張つてある」

坊主頭は手を岡持ちの中に入れた。

時計の秒針がまた十二を回ろうとした。

「組長、この岡持ち何かおかしいですよ……」

そう言いおえるや否や、岡持ちは突然、まばゆい閃光を放しはじめた。

黒いビルは轟音と共に爆発し、窓ガラスやシャッターが吹き飛んだ。

空気を響かせての爆発は、向かい側の木造の建物の窓ガラスを粉々にした。

衝撃波だ。

二階の部屋で向かい合つて将棋を指していた老人二人は椅子から転

げ落ち、慌てふためいた。

しばらく、二人は声も出ず窓の外を呆然と眺めていた。

三階建てのビルは窓という窓は吹き飛び、そこから黒煙を上げ始めた。

「カチ、いつふあい、カチ、どうなカチふたあんだカチ」

老人の一人が入れ歯を半分口からはみ出した状態で何かを喋ったらしいが、

隣の老人は聞き取ることはできなかった。

消防車が火を消し止め、実況見分をはじめた。そして爆発の原因が判明したのが翌日の昼過ぎであった。

藤田幸平は部下の下田と共にその爆破現場に現れた。

「滅茶苦茶だなあ。見るよ、三階の天井部分が丸見えだぜ」

藤田は上を見上げ、一階から二階、三階と筒抜けで天上が破壊されているのを見て

爆破の凄まじさを改めて知った。

「これじゃあ、生き残った人間はいないだろう」

「ええ、もうバラバラだったらしいです」

「でも、すごいなあ。こういう爆破現場を実際に見るなんて生まれて初めてですよ。ワクワクするな」

「馬鹿野郎！遊びじゃないぞ」

藤田は怒鳴った。

「すみません」

「ダイナマイトでも使ったのか？」

「鑑識課では、プラスチック爆弾ではないかと言っていました」

「ふーん、プラスチック爆弾ね。そんなのどこで仕入れたんだ。…
で、どこにあったんだ」

「何がですか？」

「トランプのジョーカーだよ」

「ああ、それは、歩道に置いてあったらしいです」

「ふーん、ご丁寧に歩道の上にね。ジョーカーか。新聞の見出しに
爆破魔ジョーカーって書いたブンヤがいたそうだな」

「はい、そいつのおかげで犯人はジョーカーって名付けられてしま
いました」

「まったく、ただの人殺しじゃないか。名前なんか付ける必要ない
いんだよ。ジョーカー？犯人を助長
させるだけなのに」

「ところでこのビルは広域暴力団田中組系の事務所だったようだな」

「はい、こちら辺一帯を仕切っている白根組の白根薫が組長です。

組長がこの爆弾で亡くなったかは

今確認中です。

爆発で遺体がバラバラになり身元が誰が誰のやら分らない状態で指
紋とか歯型から調べ上げてる模様です」

藤田は、爆発でシャッターが無くなった車庫の出入り口から外を眺
めた。

正面には二階建ての小屋みたいな建物が見える。
その屋根には監視カメラが二台取り付けられていた。

「下田！」藤田は大声で呼んだ。

呼ばれた下田は藤田の元に走り寄った。

「課長、どうしました」

「見ろよ、監視カメラだ」

下田は真向いの小屋の屋根に取り付けられた監視カメラを見た。

「これは、天の恵みだ。すぐ、映像が残っているかどうか確かめてきます」

「うん、解決の糸口が見つかるかも知れんぞ」

藤田はいつにない笑顔を見せた。

悪魔の笑い

携帯が鳴った。

若者はベッドから慌てて飛び起き携帯をつかみ取った。

『いやあ、元気かい』

携帯からは、あいつの声が聞こえる。

「あんたの言うとおり実行したよ。だから、早くこいつを解除してくれ」

『もちろんさ、約束だからな。約束は守るよ、安心しろ』

「だったら、今すぐ教えてくれ」

『ああ、解除を知っている奴を教えるから、メモしろ』

「解除を知っている奴って？あんた、知らないのか」

『知ってるが、そいつに教えてもらえ。今から住所と名前を言う。一度しか言わないから』

よく覚えておけ』

「待ってくれ、書くものを用意するから」

『住所は東京都…』

藤田と下田は監視カメラで記録された画像を再製し、爆破される前

の黒ビルを眺めていた。

しばらくの間、時間が止まったような画が流れるだけだった。撮られた時間が画面の右上に流れている。

十二時十分の時点で

岡持ちを持った白衣の男が自転車に乗って現れた。

藤田と下田は体を乗り出し画面を見つめた。

「あつ、来々軒の出前だ」

後ろで見ていた老人の一人が言った。

「来々軒ね」

藤田は復唱しながら画面を眺めた

数分後、出前持ちの店員が慌てた様子でドアから飛び出てきた。

「何があつたんだ」

藤田は画面に食い入った。

その後一分もたたないうちにビルの爆発が起こった。

「そこで止めてくれ。さっきの出前持ちの男の顔がハッキリ見えるところまで戻し

止めてくれないか」藤田は下田に頼んだ。

「分かりました」

画像を早送りで元に戻し、慌ててドアから出る店員の画で止めた。

「もう少しアップできないか。店員の顔を確認したい」

「はい」

下田は画像を拡大し店員の顔を大写しにした。

「この出前持ちが何か知っているかもしれませんがね」

下田はそう言いながらタバコを啜え始めた。

「ここは禁煙じゃけん」

老人の一人が下田に注意した。

「すみません」

慌てて下田はタバコを戻した。

「あの出前持ちの店員を洗い出そう。」

藤田は手を顎に当て撫でながら椅子から立ち上がった。

「あの店員は内田って名前だよ。確かそうだったよな」

「そうだ、そうだあの男は内田って奴だ。間違いない」

「知ってるんですか？」

下田は二人の老人に尋ねた。

「もちろんさ、わしら、よく出前を頼むんだよ。いつも、持ってきてくれる来々軒の兄ちゃんだよ。」

来々軒の東京ラーメンをネ。

あれが安くておいしいんだよな」

「あれは値打ちだね、なんか、食べたくなつたね。ちょっと、店に

行こうかい。

佐藤さん」

「そうしよう、そうしよう。もう、見張りはいらないからね」

そう言いながら老人達はドアの方へ向かった。

藤田は老人の背を眺めながら言った。

「来々軒の、内田って店員か。ヒョツとするとこの事件、案外解決が早いかもしれないな」

藤田は、首を大きく回し、欠伸をした。

『いいか、もうすぐ二十歳前後の男がお前の部屋を訪ねてくる。お前はそいつを黙って

部屋に入れるんだ、無駄口は叩くなよ。そいつが、お前に解除ボタンの順番を覚えてくれる。

お互いに教えあつて解除するんだ』

携帯電話からあいつ声が聞こえてくる。

「なんでそんなまどろっこしい事するんだ。直ぐ教えてくれたっていいじゃないか」

『スリルを楽しめよ。生きるか死ぬかの瀬戸際を思う存分味わうのさ。』

二度とこんな経験することはないぜ』

「…お願いだから助けてくれ」

『時限装置は残りあと五分しかない。それまでに解除しないとドカ
ンだ。』

爆破一分前に解除ボタンの順番を教える』

ドアを叩く音がした。

「畑山さん、開けてください。早く開けて」
切羽詰まった、訴えるような叫びだった。

『来たようだな。早く開けてやれ』

ドアを開けると若い男が息を切らして入ってきた。

ここまで、全速力で走ってきたのだろうか、水を被ったように額か
ら汗を流していた。

若者は挨拶することもなく告げた。

「教えてください。解除ボタンの順番を」

「教えてくれ？俺の方が聞きたい。俺の解除ボタンを教えてください」

男は携帯から聞こえる二人の会話のやり取りを聞いて、机の上にあ
るもう一つの携帯を

右手で掴みボタンを押した。

そして二つの携帯を両耳に当てたのだった。

携帯が鳴った。慌てて、若者は携帯を取り出し叫んだ。

「話が違っじゃないか！この人は解除ボタンの順番を知らないと言
ってる」

『そう慌てるな。まだ三分ある。とりあえず、お互いに上着を脱い
で上半身裸になれ』

二人は玄関先で急いで服を脱ぎ始めた。

上半身裸になった二人の胸には五、六センチ四方で厚さ一センチ程度の箱のような物が

ガムテープで落ちないように張り付けてあった。

その箱から赤と青のリード線が出でいてその先端に細長いプラスチックの筒が体に止めてある。

そのプラスチックの筒には小さな三つのボタンがあった。それぞれ赤、黄、青の色付けで区別してある。

『脱いだか？』

「脱いだ、次はどうすればいいんだ」

『あと残り時間一分半だ。いいか、今から相手方のボタンを順番に言うからその通りに押すんだ。分ったか？』

「ああ、早く言ってくれ」

『じゃあ、解除ボタンの順番を教える。まず赤のボタンを押せ』

「赤のボタン」

「赤のボタン」

二人はそれぞれ告げられた色のボタンを相手方に言ってそれぞれ自分のプラスチックのボタンを押した。

『次は黄色だ。間違えるな、間違えたらドカンだぞ』

「黄色のボタン」

「黄色のボタン」

男は両手で携帯を持ちながらしばらく寡黙になった。
残り時間が二十秒を切った。

「最後の番号を早く教えてくれ！」
若者は泣きそうな声で訴えた。

『分かった。最後の一つを教える。残り時間十秒だ。…赤だ』

「赤！」

「赤！」

両手に持った携帯から突然激しい雑音が一瞬間こえたかと思うとプツツと

携帯の音が消えた。

「二人共、永遠に苦痛から解放されたようだな」
男はけたたましい声で、笑い始めた。

捜査会議

午後9時過ぎに捜査会議は開かれた。

有力な参考人の一人、来々軒の出前持ちが、死体で発見され、しかもその死因が爆発物によるものだった。

一連の連続爆破魔による犯行と捜査員達は断定した。

百人体制で捜査を開始しているが何の進展もないまま二週間が過ぎようとしていた。

捜査主任の平形はユックリと椅子から立ち上がり、マイクを持って咳払いを一つ放った。

「みんなご苦労さん、夜遅くまで大変だが犯人検挙まで頑張ってもらいたい。

今までの捜査で判明したのは被害者の身元と、犯人の殺しの手口だ。爆薬関係に相当詳しい人物に見受けられる。

使用された爆薬はプラスチック爆弾、いわゆるC4って奴だ。

過去十年、それに類する爆薬が、盗難したという情報は入っていないおそらく、犯人が独自でこしらえた物だろう、と思われる。

爆薬作成に関する材料、薬品等の購入者をみんなに手分けして捜査してもらったが芳しい情報はなかった。

引き続き、その線から捜査を継続してほしい。

次に被害者達の人物像が少しずつ分ってきた。詳細は藤田捜査課長が述べる」

隣の席でガムを噛んでいた藤田は、そのガムを包装紙の銀紙に出し包めて灰皿に捨てた。

立ち上がった藤田は、疲れた顔をして座っている捜査員達を見ながら言った。

「この二週間の間に十六人の犠牲者が無残な殺され方で死んでいった。

巷では、この殺人鬼をジョーカーって呼んでいるらしいが俺たちはそんな呼び方はしない。

単なる卑劣で残忍な殺人鬼だ。

今までの捜査ではつきりした事は、これはテロじゃないってことだ。犯行の目的、傾向は、被害者の身元を洗っていくうちに大体見当がついてきた。

まず、最初の廃墟ビルで殺害された四人だが。

1人目の後藤 力、二十四歳。無職。

この男はヤクの売人だ。

この後藤と関連のある男が白根 薫四十五歳。

白根組の組長で、ビル爆破の犠牲者だ。

白根組はクスリを扱って荒稼ぎしていた。

後藤はその白根組から麻薬を購入し一般人に売り渡していたらしい。所轄の警察がマークしていたがなかなか決め手がなく逮捕ができなかった。

次に

島田純也、二十三歳、コンビニのアルバイト店員。

こいつは、十八歳のとき無謀運転でひき逃げを起こし捕まっている、こいつのせいで三人の女学生が亡くなった。しかも、その後、飲酒運転で免停になり、さらに無免許運転で捕まっている。

次、

沖田 満。二十四歳。

派遣社員。この男とアパートで爆死した畑山 聡の二人は

十七歳のとき、女子学生を拉致、監禁し暴行殺害を起こした。

世間を騒がせた事件だ。

みんなも知っているだろう。

未成年という事で、少年院送り。

そして、二年で出てきた。

次、

高島 郡司 二十歳。大学生。

こいつは中学生の頃、ボウガンで浮浪者を標的にして遊び、二人を死なしている。そのときの調書でこいつは面白い事言っている。

人は殺していない。

虫けらを殺しただけだとね」

捜査員の中からため息が漏れた。

「あと、来々軒の出前持ち、内田 太郎。

二十五歳。こいつは、小学生の少女だけを狙う

レイプ犯だった」

捜査員たちはざわめきだった。

その中の一人が言った。

「つまり、その殺人鬼は世の中のダニをきれい片付けてくれたと言うことですか」

「我々の仲間じゃないか」

捜査員の一人がそんなことまで言いだした。

それを聞いた藤田の臉が痙攣を起こした。

「いいや、違う。奴が殺した人物の中には罪のない人間が一人いる」

騒がしくなった捜査員達が、一斉に口を瞑った。

「爆破されたビルの犠牲者の中に四歳の女の子がいた。白根 薫の一人娘だ」

「ブンヤ共はこの殺人鬼をヒーロー扱いにするだろう。とんでもない話だ。

こいつは、罪のない子供を殺したんだ。

もう一度言う。奴は卑劣で残忍な殺人鬼だ。

一刻も早くこいつを捕獲するのが、俺たちの使命だ」

おしおき

損得抜きで腹を割って話しあえる仲になり、そこから信頼、友情が芽生えれば、

仲間の結束はより固くなる。

と思うのは妄想かもしれない。いつも油断は大敵という言葉を思い出すことだ。

心のぶれは誰にでもある。

闇に隠れた本心は当の本人でさえも覗けない時がある。

その時が来るまでは…。

順子を付け狙う男共を調べ上げるのに元暴走族の仲間達は、奔走してくれた。

ただ、彼らも仕事を持っている。

四六時中奴らの身辺を探るわけにも行かない。

休日を利用し、それぞれ手分けして調べたのだった。

死を待ち続けるだけの横たわった弟の願いの為に俺のダチ達は無償で動いてくれた。

調べていくうちにある程度の事が分かった。

BMWの運転席から順子に声を掛けていた金髪の男、名前は小和田快。

奴の過去から、素顔が見えてきた。

高校生のときに傷害事件を起こしていた。

ところが、立件されずでウヤムヤになった。

俺もダチ達も、数えきれないぐらいの喧嘩をやった。
傷害事件すれすれの刃傷沙汰も起こしている。が、相手はすべて暴走族。

チンピラ共だ。一癖、二癖もある輩だ。

そんなこんなで

警察に一、二度お世話になったこともある。

ところが、小和田の傷害の相手は、女性だ。

しかも、卑劣な婦女暴行。

なのに、刑事事件になっていない。

その理由を知って俺たちはあきれた。

小和田の父親は警察庁の役付きをやっている。

警察官僚の一人だ。

そのせいか表沙汰にならずにすべて内々にことが運びお咎めなしだ。
信じられない話だ。

権力の前では正義もねじ伏せられるようだ。しかも、正義を施行する組織が

正義を捻じ曲げている。

小和田とつるんでいる輩があと三人いることがわかった。

あのBMWに乗っていた男達だ。

仕事もろくに就かないゴロツキ共だ。そいつ達の名前と、素性も分かった。

「奴ら、どうやら順子さんに狙いをつけているようだ」
族仲間の一人、キツネが俺に告げた。

そうそう、俺達、族仲間は名前では呼び合っていない。
みんな愛称で呼んでいる。
ほとんど俺が名付け親だが。

ちなみに俺はウルフ。
意味はない。

仲間がそう名付けただけだ。
先ほどのキツネと言う奴は、俺が名付けた。

ずる賢さは、ダチ仲間では群を抜いている。

「順子さんもえらい奴に目を付けられたな」
もう一人の仲間スカンクがあきれた顔で言った。

スカンク、コイツは蓄膿症で鼻が馬鹿になっている。
だからどことなくさい臭いも平気な奴。
しかもコイツのおならは天下一品ときている。
臭いも音も。

「今のところまだ、主だった動きはない。
声を掛けている程度だがいつ牙を剥くか分からない。時間の問題だ」
族仲間では一番の強面、ベルマンがはき捨てるように言った。

ベルマン・・・ホテルの従業員ではない。ドーベルマンの略だ。
性格はそのものズバリ、ドーベルマン以上の獰猛な奴だ。

「どうする。あのままほっとけばあいつらは、いずれ順子さんを襲うだろう。」

特に、あの小和田って奴、蛇のように執念深い男のようだ」
仲間の中で一番若いコブラが俺に忠告した。

コブラ・・・それほど意味はない。コイツは自分で自分のニッケネームを付けただけだ。

俺が変なネームを付ける前に。

「そろそろ、奴らのお尻をペンペンしてやらないとまた悪さするぜ。三人共まとめて面倒見てやったらどうだい」
ベルマンは、タバコに火をつけながらいつもの鋭い眼で俺に探りを入れてきた。

どうやら仲間達の血は騒いでいるようだ。
相手は申し分のない卑劣な豚野郎共。
いや、豚以下だ。
情けなど必要はないだろう

「久しぶりに一暴れするか。ここんどこ、体もなまっているからな」
俺はそう言った後、周りの連中を見渡した。

俺のその言葉を仲間たちは待っていたようだ。

皆、頷きながら笑みを浮かべ始めた。
昔の元暴走族、ワルそのものの顔がそれぞれ蘇った。

俺たちがやったことはそう大した事じゃない。

この豚共、いや、豚以下共が、今まで犯した罪に比べれば可愛いものだ。

要するにベルマンが言ったようにお尻ペンペンをしてやったまで。

こいつらのだらしない親達がいなかった賤というものを代わりに俺達が出したまでのこと。

計画はキツネが立てた。

とにかく早く終わらせなくちゃいけない。

事を早く済ます、というのが俺達の主義だ。

まずは奴らを拉致する。

正義のために、世直しの為に奴らを捕らえる。

しかし、どうやって奴らを捕まえるか？

まずは餌をやるしかない。

極上の餌で奴らを吊り上げる。

奴らの餌といえば、女だ。

小和田達におとりの女を近づける。

女に奴らが食らい付いたところを一網打尽。

ちょうど打って付けの女がいる。

いや、女モドキといったほうがいいのだろう。

名前は

フーコ。

これも俺が名づけたニツクネームだ。

おかまのフーコ。

通称カマフー。

もちろん俺のダチの一人だ。

今はバー「釜釜」でまじめにオカマして飯食っている。

もともと変わった奴だったが、ここまで変わるとは思っていなかった。

最初に会った時、おねえ言葉が鼻に付いた変わった奴だった。

なぜか俺に纏わり付いて慕ってくる変わったニューハーフ。

もちろん俺はその気はない。

だが、

厚化粧をし、スカートをはかせればほとんど女と見間違ふ。

まさしくいい女の部類に入る。

ただし、男。

りっぱな物が付いている。

それに加え、腕っぷしも強い。

空手に関しては俺とどっこいどっこいだ。

そのカマフーを奴らに近づけることにした。

前から見ても後ろから見ても背中がぞくぞくするぐらいのグラマラスな容姿、カマフー。

（だけど、男）

俺達は小和田達がいつもたむろするバーを探し当てた。

先にボックス席に着いて奴らが来るのを待つ。

カマフーはこのバーで、前もって臨時ホステスになってもらった。

面接で直ぐ採用となった。

この店のマスターがチョツカイを出すようになったと、カマフーが言っていた。

まずは完璧だ、と俺は確信した。

きつと、小和田達もカマフーに言い寄るだろう。

カマフー

小和田達がバーに来た。

四人たむろし、肩を揺らしながら俺達の前を通った。

俺達のボックス席から少し奥まった場所にある、ビップ席という少し敷居の高くなった部屋に入った、

そのビップ席は周りが鏡に覆われた特別な部屋だ。

俺達からは、ビップ席の中が見えず、ビップ席からは俺たちが丸見えというマジックミラーで覆われている席だ。

その席から気に入った女の子を指名できる特別料金の場所という事のように。

ちょうどそこにタイミングよくカマフーが現れた。

直ぐに指名がかかったらしい。

ビップ席には小和田達だけがいる。

小和田はカマフーを指名したようだ。

あとは、カマフーの腕次第だ。

もちろん、俺達の席にもそれなりの普通のホステスが隣に纏わり付いている。それはそれで

こちらでも楽しんで時間を潰すということになる。

特に楽しんでいるのが、ベルマンだ。こいつの弱点は女だ。

まったく、俺達が白けるぐらいにイチヤついている。

時間が経つにつれ、次から次へと客が入ってきた。

俺達はノンアルコールのビールで話が弾む。

しかし、普通のビールよりもアルコールフリーの方が値段が張るのが癪に障る。

しかし今日は、俺達、それぞれバイクで来たからしょうがない。

二時間経過後、小和田達とカマフーが連れ立ってボックス席から出てきた。

カマフーが俺たちに親指を立て合図をした。
どうやら首尾は上場のようだ。

俺たちも直ぐ席を立とうとしたが、ベルマンがなごりおしそくにホステスの一人と

座ったままイチャついている。

俺達は無視した。

「朝までそこにいろ」

と俺は捨て台詞を吐いてバーを出た。

もちろん、ベルマンは慌てて追いかけてきた。

束の間の別天地から目が覚めたようだ。

いつもの鋭い目が変わっている。

俺達の携帯にはGPSでお互いにどこにいるかを確認できる。

カマフーを見失ったとしても携帯で位置検索ができる。

カマフーは首尾よくまんまと小和田達によってナンパされた。

俺たちは、奴らの車をバイクで尾行した。

数台のバイクが一斉に後を付けるのは目立つためそれぞれ、バラバラになって尾行した。

BMWは、人気のない埠頭で止まった。

俺と、ベルマンはバイクのヘッドライトを消しゆっくりとBMWに近寄り

遠巻きに様子を伺った。

カマフーの事だから心配はないと思うが、しかし相手は男四人。どうなるかが見ものだ。

つまり、心配よりも興味深々だった。

カマフー、ひょっとしてその気になってるんじゃないかと。どちらかといえばそちのほうがか心配だった。

仲間のダチ達が送れて俺たちに合流した。

カマフー血迷うなよ。

俺は願った。

車は、止まったままだ。

時間はどんどん過ぎていく。冷たい風が舞い始めた。

ベルマンは、言った。

「アイツ、やられてるのか」

「まさか」

と、キツネが言う。

「行ってみようか？」

コブラが心配そうな顔をした。

計画では車から出てくる四人を、俺たちがひっ捕まえるはずだ。しかしあまりにも遅い。

俺達は痺れを切らし、BMWまで走り寄った。

そして車の中を覗き込んだ。

カマフーは、助手席でタバコを燻らせていた。
四人の男は…と言えば、

小和田は、運転席で気を失っている。

あとの三人は、と見てみると後部座席で同じく気を失っていた。

俺はドアを開けた。

とたん、カマフーはあのイントネーションが鼻にかかった声を発した。

「おそいわよ！」

「遅いつて？こいつらを車の外に出す手筈だったろう」

「そうする前に襲われたーの」

「なるほど、しかし何だ、その嬉しそうな言い方は？」

「こわかったのよ」

「誰が？」

「わたしよ！」

「ところで、何でこいつら気を失ってるんだ」

「だって、ズボン下げるんだもん」

「ズボン下げたら気を失うのか？」

「そうじゃあなくて、握っちゃたの」

「だから誰が？何を握ったんだ！」

俺はもうこのカマフーとの会話にイラついてきた。

「私が、たまたま、タマタマチャン握っちゃたの」

俺達は目が点になって首をかしげた。
しばらくして納得した。

そうか、このカマフーの握力は確かクルミを丸ごと素手で割るぐらいの力があつたんだ。
なんて奴だ。

だからこいつら泡吹いて気失ってるのか。
俺はもう言葉が出なかった。

もう充分過ぎるぐらいこいつらに焼き入れたみたいだった。
しかし、可哀そうだが本番はまだこれからだ。

悪魔の呟き

体に加わった痛みは、それが去った後、あまり記憶に残らないのはなぜだろう。

身悶えるような激痛も時間が過ぎればその感覚は曖昧模糊となり、忘れ去ってしまうことさえあるのはなぜか。

精神的苦痛に比べれば肉体的苦痛は簡単に消えていくものなのか。自傷行為が精神的苦痛を肉体的苦痛に置き換えて忘却する代償行為？

だとすれば、

犯罪者共に精神的苦痛を思いっきり味合わせてやらなければ。

地獄の恐怖に等しいものを。

朽ちぬ苦痛、恐怖がそいつの心を切り刻むように。

懺悔と後悔の念も与えぬぐらいの底なしの戦慄と絶望を。

ジョーカー

俺たちは気を失った四人をある廃屋ビルの屋上まで担ぎ上げた。用意したのはガムテープと、麻縄のロープ。

まず、四人の目と口をガムテープで覆った。そして両手を背中に回しガムテープで縛った。

だらしなく脱ぎかかった四人お揃いのジーンパンを脱がしてやった。トランクスだけは勘弁してやろう。

片方の足首にロープを巻きつけ

そしてそのロープのもう一方の端を錆付いた手摺に括りつけた。

後はこいつらが目覚めるのを待つだけだ。

ベルマンは腕時計を覗いた。

「時間は、4時10分」

夜が明けるまではまだ時間はある。

「早く仕事を済まそう」

体躯のでかいザラシは、俺に言った。

もうお分かりだろう。

ザラシはアザラシの略。

アザラシのような体躯。

バイクに乗ったザラシは、まさに馬に乗ったかつての朝青龍だ。

まったく、馬の身にもなれ・・・だ。

「だめだ、こいつらが目を覚ますまでは」
気を失ったままでは意味がない。

これから俺たちがすることをこいつらの頭と心に焼き付けるのだ。

「分かった」そう言った後
何を思ったのか仲間の一人のカラス（この男はただ顔が黒いだけ）
は、

おもむろに自分のズボンのチャックを開けようとした。

「何をするつもりだ」

「目を覚まさせてやるのさ。こうして」

カラスは、自分の一物を取り出し、狙いをつけ四人の顔めがけて勢いよく放射した。

それを見ていた他の仲間も面白がってカラスをまねた。

気を失っている四人の顔は、臭いまみれのシヨンベン面と化した。

なんともいえない異様なにおいが当たり一面に漂いはじめた。

四人の豚以下共は黒のライダースーツで身を固めた男の便器と化した。

さすがに俺はその行為には参加できなかった。

一体誰がシヨンベンまみれのこいつらを持ち上げるんだ。

全く後先考えない奴らだ。

気を失っていた一人が勢いよく咳き込みながら、といってもガムテープで口が覆われているため、

思うように口から吐けず顔を歪めながら鼻から汚水を垂れ流した。

ほとんど溺れ死ぬ一歩手前のように。

ほかの三人もどうやら夢から覚めたようだ。

「お目覚めのようだな」

ベルマンは黒いライダーブーツの先で横たわっている小和田の顔を小突いた。

後ろ手に縛られた四人は顔を上げ唸り声で何かを訴えている。

俺は囁くような優しい言葉で話しかけた。

「どうだい、今の気分は」俺は、しゃがみこみ小和田に尋ねた。
小和田には、俺の声がくぐもったようにしか聞こえないだろう。

俺は、フルマスクの上にフルフェイスのヘルメットを被っている、
声を出すのが一苦労だ。

周りの仲間も同じいでたちだ。

「えらい目にあつたな。あそこの痛みは直ったかい」
俺はそう言いながら加害者カマフーの顔を見上げた。

カマフーは、ばつの悪そうな素振りで見上げた。

俺は、小和田達に向かって言った。

「ここは廃墟同様の病院。俺たちがいるのはその屋上。
お前たちにはもう一つの試練が待っている。

なーに、たいしたことじゃないさ。
簡単なことだ。

この屋上からぶら下がってもらっただけさ。

2、3時間もすれば誰かが気づいてくれるさ。たぶん。
まあそれまでの辛抱だ、だいぶ冷えるが我慢するんだな」

俺たちは嫌がる四人を手摺の外に出した。
コンクリートの淵に立たせ、目を塞いでいたガムテープを思いつき
りよく剥がした。

眼下は闇で覆われ、奈落の底のようだ。

小和田達は必死になって首を横に振った。

ガムテープの中で言葉にならないもがき声を発している。

「いいかい、決して暴れるなよ。手摺が錆付いていて壊れる危険があるからな。

手摺に括られている命綱だけがお前たちを支えている。

それを忘れるな」

俺たちは四人をバンジージャンプよろしく闇の底へ突き落とした。

小和田の最後

「さあ、もう撤収しよう」

俺は仲間達に告げた。

「忘れ物はないか」

ベルマンは仲間に尋ねた。

「忘れ物と言ったら、スカンクの臭いシヨンベンぐらいだ」

ザラシは、笑いながら言った。

「何言ってるんだ。俺だけじゃないだろう、俺なんかザラシの量に比べればスズメの涙さ」

「確かに、ザラシは長かったなあ。お前の膀胱は恐竜並みか」

カラスはそう言いながら、ザラシのパンパンに膨れ上がったライダースーツを眺めた。

「恐竜の膀胱見たことあるのか？」

ザラシは不機嫌な声で怒鳴った。

「お前たちのシヨンベン談義は帰った後で好きなだけやれ」
俺は早くこの場から去ろうと思った。

その時、突然俺の体が硬直した。

冷水を浴びたように体中が凍りつき身動きが取れない、そんな感じだ。

この感覚は俺にとって初めての経験だ。

「感じたかい？」

声が聞こえた。

弟が俺の心に話しかけたのだ。

「すまない、僕が感じたのを、兄さんの体にまで伝播しちゃったようだね」

何だいこの感覚は？

「僕にもわからない。初めての体験だ。まるでこの場所が凍りついたようだ」

気温の低下か？

「いや、物理的な現象じゃない。僕だけに感じる冷氣だ」

冷氣？

「僕の心を凍らせるような強い冷氣が近づいている」
その冷氣の正体はなんだ？

「分からない。とにかくここから早く出た方がいい」

「ウルフ、どうしたい」

ベルマンは俺が呆然としているのを見て心配したようだ。

「いや、何でもない。早くここから出よう」

俺はもう一度、今いる屋上の全景を見渡した。

闇に覆われているその場所は不気味に静まっているだけだった。

夜空には星が煌めいている。

小和田にとって初めて見る光景だった。

コンナにきれいな夜空があったのか

小和田は逆さに吊るされたままの体勢で、その煌めく夜空を見つめた。

ロープに縛られた右足の感覚はすでに無くなっている。

肌を突き刺すような寒さは、次第に恐怖を上回り身に堪えてはじめた。

小和田は今まで犯した自分の罪を思い浮かべた。

まずは、若い女性家庭教師を強引に犯した。

始まりここからだった。

親が始末してくれた。金銭的に解決したのだ。

次は、いじめだった。

いじめ抜いたそいつは学校の屋上から飛び降り自殺した。そいつが書いた遺書には小和田の名前が載っていたが、警察と学校は結託してその遺書の公表を抑えた。要するに小和田の名前は出なかったのだ。

警察官僚である父親の威光のおかげだった。

小和田の親は次から次へと問題を起こす息子の行動にさじを投げた。

小和田は自分の犯した罪を一つ一つ思い起こした。

被害者たちの顔が次々に頭に浮かびそして消えていく。

全ての者たちがこのような恐怖を味わい、絶望に押し潰されていった。

自分のせいで…。

小和田は初めて自分の犯した罪の重さを味わった。

階段を上がる靴音がする。

ゆっくり慌てず、乱れもせず、闇の中に靴音は静かに鳴る。

足音は屋上で止まった。

そして再び靴音は鳴り響いた。

迷うことなく足音は目的の場所に向かった。

そして止まった。

小和田は人の気配を感じた。

屋上に誰かがいる。

気付いて誰かが助けに来てくれたのだと思った。

口をテープで塞がれた小和田は必死に声にならない唸り声をあげた。吊るされた他の四人も同じようにうめき声を必死にあげていた。

「助かった」

小和田はそう思い思わず涙ぐんだ。

闇に慣れた目には屋上にいる人間が男だと分る。

顔形ははっきりしないが、力強いシルエツトが目映る。

「助かったら、真つ当な人生を歩もう」

小和田は心に誓った。

屋上の男は何かを取り出した。

星明かりに照らされ、それは僅かに煌めいた。

「何をするつもりだろう」

小和田は男のする仕草に見入った。

右側の端にいる仲間のロープにその光る物体を当て始めたようだ。

ロープは麻縄で二重に縊つてある代物だ。

男の手に持つているものは切れ味の鋭そうな刃渡り二十センチもあるうかと思われる

ナイフだった。

麻縄に当てそのナイフをユックリと前後に動かし始めた。

張りつめた麻縄は弾けるように繊維が少しづつ裂けていく。

二重に縊つてある縄のうちの一つが完全にナイフで切り離された。

吊るされた男の足首を支えているのは、たよりなく細く伸び切った一重の麻縄だけになった。

「何をしたんだ」

男が何をしたのかはまだ分からない。

小和田の眼に突然、光が入った。

ボツと男の手元が光りはじめたのだ。

「ライターに火を点けた？何をするつもりなんだ」

男はライターの火を麻縄に近づけた。

小和田は、その男が何をしようとしているのか今はつきりと分った。麻縄を燃やそうとしているのだ。

麻縄に火が灯った。

男は、次の麻縄にも同じように行動を起こした。

灯った麻縄の光で男のしている様子がはつきりと分る。

ナイフで麻縄を半分切り落とし、残った麻縄を火で燃やそうとしている。

男が三人目の麻縄にナイフをあてがった時、ズドっという鈍い音が小和田の頭上、つまり地上で鳴った。

最初に火を付けられた仲間の一人が落下し、落ちたのだ。

「やめる！なんでそんなことをする！」

小和田は口ごもりながら叫んだ。

「地上から二十メートル以上ある。足を吊るされているから頭から真っ逆さまだ。

落ちれば頭が砕け、脳みそがグシャ。オツとまた落ちた」

二人目が地面に叩きつけられる音がした。

「小和田、今度はお前の番だ。お前に最高の時間をプレゼントだ。自分が死ぬ瞬間を味わえるんだ。十分に楽しめ」

小和田のすぐ隣の仲間が目の前から消えた。

「小和田、お前だけはユックリと時間をかけて死の瞬間を味わせて

やる。ナイフは使わず

ロープを焼切るのみにしておく」

男はライターでロープを炙った。

ロープに火が付き燃え始めた。

「お前は、一体誰なんだ」

男は、一枚のカードを投げた。

小和田の目の前にそのカードが一瞬目に入った。

「ジョーカー……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3494x/>

最後のピエロ

2011年11月23日20時52分発行